

チャペル・ブックレット

宗教部では今までの「宗教講演会」のお話をブックレットにまとめ、発行しています。無料でどなたにでも差し上げますので、ご希望の方は、キリスト教センターへどうぞ。チャペルにも置いてあります。

- No.1. 「経済の論理と人間の論理」(塩沢 美代子)
- No.2. 「心を問い続けて」(谷 昌恒)
- No.3. 「国際化時代におけるキリスト教の使命」(徐 洸善)
- No.4. 「激動化する現代史と神のみことば」(池 明観)
- No.5. 「生きることの感動」(金 纓)
- No.6. 「生きるよろこび」(村田 佳寿子)
- No.7. 「心を支えているもの」(山本 将信)
- No.8. 「主の愛この眼にありて」(武岡 洋治)
- No.9. 「日本におけるキリスト教主義大学の使命」(池 明観)
- No.10. 「いのちを支えるホスピスケア」(柏木 哲夫)
- No.11. 「天と地のひびき」(小塩 節)
- No.12. 「絵本のちから」(松居 直)
- No.13. 「ハイジ、クララは歩かなくてはいけないの？  
—こどもの物語と聖書に見られる<しょうがい者>差別—  
(荒井 英子)
- No.14. 「お父さん、僕はなに人？ —間 (はざま) から読む聖書—  
(金 永秀)
- No.15. 「人権・生命の尊厳—野宿生活者の現場から—」(松本 普)
- No.16. 「地球に、そして日本に生まれて今ここにいる」(太田 信吉)
- No.17. 「メイク・ア・ウィッシュ〜夢の応援団」(原 順子)
- No.18. 「人間関係を生きる知恵」(島 しづ子)

目 次

タレントを見つける大学生活…………… 増田 喜 治 (2)

教会と私 …………… 國 井 義 郎 (6)

どんなときでも …………… 佐 藤 真 史 (8)

ボランティアのすすめ …………… 渋 山 照 夫 (11)

新入生の皆さんへ ……………(14)



希(のぞみ)館

# タレントを見つける大学生活

増田喜治

「天の国はまた次のようにたとえられる。ある人が旅行に出かけるとき、僕たちを呼んで、自分の財産を預けた。それぞれの力に応じて、一人には五タラント、一人には二タラント、もう一人には一タラントを預けて旅に出かけた。早速、五タラント預かった者は出て行き、それで商売をして、ほかに五タラントをもうけた。同じように、二タラント預かった者も、ほかに二タラントをもうけた。しかし、一タラント預かった者は、出て行って穴を掘り、主人の金を隠しておいた。さて、かなり日がたってから、僕たちの主人が帰って来て、彼らと清算を始めた。まず、五タラント預かった者が進み出て、ほかに五タラントを差し出して言った。『御主人様、五タラントお預けになりましたが、御覧ください。ほかに五タラントもうけました。』主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』次に、二タラント預かった者も進み出て言った。『御主人様、二タラントお預けになりましたが、御覧ください。ほかに二タラントもうけました。』主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』ところで、一タラント預かった者も進み出て言った。『御主人様、あなたは蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集められる厳しい方だと知っていましたので、恐ろしくなり、出かけて行って、あなたのタラントを地の中に隠しておきました。御覧ください。これがあなたのお金です。』主人は答えた。『怠け者の悪い僕だ。わたしが蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集めることを知っていたのか。それなら、わたしの金を銀行に入れておくべきであった。そうしておけば、帰って来たとき、利息付きで返してもらえたのに。さあ、そのタラントをこの男から取り上げて、十タラント持っている者に与えよ。だれでも持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。この役に立たない僕

を外の暗闇に追い出せ。そこで泣きわめいて菌ぎりするだろう。』」

(新約聖書 マタイによる福音書25章14節～30節)

## 才能を見つける冒険

もしかしたらこの10分ほどの話が皆さんの人生を変えるかもしれない、そんな思いで話します。講壇の横にはクラッツといってロウソクが4本並んでいます。毎週1本1本と点火していきます。待降節、イエス・キリストの誕生を待ち望むということで、英語では“Advent”(アドヴェント)といいます。アドヴェントとはアドヴェンチャー、冒険のことです。「神ご自身がキリストの体を通して冒険をされた」ということを思い起こすのがクリスマスの時です。私たちも自分の才能を見つける冒険を是非したいものです。

今日の話はタラントの話です。英和辞典でタラントを調べると、語源は先ほど読んだマタイによる福音書25章のタラントの話からと書いてあります。タラント、才能をどのように自分で理解するか、それが人生の成功の秘訣になっています。タラントはギリシャ時代の貨幣または物をはかる単位として使われていましたが、聖書の影響を受けて才能を意味するようになりました。タラントとは単なる物の尺度を示す定義からタラント(才能)へと進化しました。すごいですね。英語という言語には、聖書の深い思想があります。

## タラントの話

聖書にタラントの話がありましたね。5タラントは5千万円と考えてください。2タラントは2千万円、1タラントは1千万円です。

大金持ちの主人がいました。主人は天と地を創った神のことですが、大金持ち

の主人が召使に5タラント、2タラント、1タラントを分けて旅に出ます。そして「かなり日がたってから」と書いてありますが、これは世の終わり、最後の時のことです。5千万円預かっていた人はどうしたか、商売をしてもう5千万円儲けました。2千万円預かった人はどうですか。商売して2千万円儲けました。最後の清算の時に主人が同様に2人に言いました。「あなたはわずかなものに忠実だったから多く任そう。」わずかなものに忠実だった、これがキーワードです。

才能教育というのは、たくさん才能を持っている人が、さらに才能を持つために教育するのが才能教育ではありません。わずかなものを増やしていく、これが才能教育です。上から見ると、1タラントも2タラントも5タラントも10タラントも100タラントも全部一緒です。天の神から見ると、私たちがどんな才能を持っているかは量ではありません。質です。私たちに何ができるか、どれだけすごいことができるかという量ではなくて、タラントをどのように管理していたか、わずかなものにどれだけ忠実であったかがポイントです。ですから日本の才能教育は間違っています。才能ある人がもっと才能を持つではありません。

さて、1タラント預かった人はどうしましたか。主人が怖いので、地面の中に自分のタラント(才能)を隠していました。主人はどう言ったのでしょうか。「あなたよく考えなさい。銀行に入れていたら利息がついていたのに、なんで地面の中に埋めていたのですか。」1タラントを預かつ

た人は役に立たない召使として裁かれて、そして追い出されます。なぜでしょうか。1タレントを預かったからではありません。何もしなかったことに対して主人は裁きました。

### 大学生活でタレントを見つけよう

大学生活で皆さんのタレントをどうやって見つけたらいいでしょうか。その方法の幾つかを紹介したいと思います。まず1つ目、タレントはある、才能はあると、しっかりと信じてください。みなさんにしかないタレント、1タレント、2タレントが確かにあります。でもそれは学校が必ずしも評価しません。成績にも反映されません。親も評価しないかもしれません。自分にタレントがあるということをしかり信じること、これがタレントのある大学生活を送る第1のポイントです。

2つ目、タレントは小さなところからスタートしてください。小さなところからで良いのです。例えば今まで話したことの無い人と話をする。「あいつなんかどうも話合わないかも」と思っている人と話をするのです。そうするとその人の豊かな世界に出会うかもしれません。本学には私を含めてユニークな教職員がいっぱいいます。研究室に行って、話をしてみてください、ついでにお茶でもご馳走してもらったら万々歳です。そこで自分の才能を教えられるかもしれません。私たち教職員はいろんな経験を持っています。皆さんの持っているタレントを大きく、大きくする可能性が私たちにあるかもしれません。自分の小さな、小さな世界、社会、仲間だけで閉じ困らないで、ドアをちょっと開けましょう。すると自分の才能(タレント)がどんどんと増えるかもしれません。ぜひ自分のタレントを発

見するために小さなことを心がけてください。

3つ目、今まで経験したことの無いことをしてください。例えばこの瀬戸キャンパスから高蔵寺まで歩いてみてください。すると「ああ自然がキレイだなあ」「こんなおいしいお店があるのか。」などと、色々な事に気が付きます。自分の才能は自然を味わうことかもしれません。おいしい店を探すことかもしれません。ちょっと気落ちしている友人を励ますことかもしれません。たくさん仲間をつくることかもしれません。自分の才能を地面の中に隠さないで、正しく忠実に管理して、少しずつ、少しずつ増やしていく、そんな関わりを、そんな営みを、そんな試みをこの大学生活の中でしていただきたいと思います。素晴らしい世界が待っているかもしれません。心を広げてください。自分の持っている才能を0.01%でもいいです、0.1%でもいいです、増やしていきましょう。自分の才能が増えていくと、周りの人の才能に気が付きます。

最後に、旅行してください。旅は先ほど言ったように大学から高蔵寺まででも旅です。北海道でも、アフリカ、アジア、地の果てでもいいです。旅行してください。自分の才能を見つけていただくチャンスがいくらでもあります。違う環境に身を置いてください。自分の才能を開発できない人、自分の才能を地に埋めていく人はもちろん会社に入ってから、会社の企業能力、仲間の才能を大きくできません。それだけではありません。皆さんが結婚をし、子どもができた時に、子どもの才能を誰が大きく成長させていくのですか。皆さんですよ。自分の才能を少しでも大きくできない人は、子どもの才能を大きくする手助けができないかもしれませ

ん。ぜひこの豊かなキャンパスで、自分の才能を見つけてください。

### アドベンチャーを楽しむ

まずは才能があることを信じてください。まだ才能がわからない人がいるかもしれませんが。でも自分には小さな才能があると確信してください。いや、あるのです。皆さんの心が動いているように、皆さんに心があるように、皆さんが今ここに存在しているように才能は存在します。自分にとって自分にしかない、天から与えられた才能に目覚めてください。才能を忠実に管理して少しでも増やしていくという営みの中に、実は様々な冒険、

(ますだ よしはる リハビリテーション学部教授 2014.12.5 チャペルアワー奨励)

アドベンチャーがあります。そのアドベンチャーを楽しんでください。話したことの無い人と話してみてください。嫌だなんて思っている人とも話してみてください。行ったことの無い研究室に行ってノックしてみてください。なんかすごい世界が待っているかもしれません。皆さんの才能がだんだん大きく開花していきます。行ったことの無い場所へ行ってください。行ったことの無い国に行ってください。話したことの無い外国人の人と話をしてみてください。どんどん才能が大きくなって、「ああ自分はこんなにも素晴らしいタレントを持っていたんだ。」と、きっと分かると思います。





# 教会と私

國井義郎

## はじめに

私は本日のカレッジアワー奨励者の國井義郎です。法学部で行政法を担当しています。本日は、「教会と私」というタイトルで、本学チャペルでの諸活動や私の経験や感想を交えて「奨励」という形で皆さんと対話する機会に恵まれました。この場をお借りして感謝する次第です。

そもそも私の「義郎(よしお)」という名前は、それ自体、父が「山上の説教(または垂訓)」の一場面を伝える新約聖書マタイによる福音書6章33節の「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。」の一節に因んで命名したものです。私は、誕生後しばらくして聖書のお世話になったのですが、定期的に教会へ足を運ぶようになったのは、父母や妹と共に、大阪にある寝屋川キリスト教会の日曜教会に参加していた頃を除くと、名古屋学院大学法学部に着任後となりますから、熱心なキリスト者からすれば「ずぼら者」ということになります。

さて、本学は、「敬神愛人」の建学の精神の下で、名古屋キャンパスでは、オルガンアワー(月曜日)、チャペルアワー(火曜日)、カレッジアワー(木曜日)のチャペル行事を催しています。私にとって、これらの行事は、オルガン演奏に接する機会を得たり、普段考えていないことを考えたりする機会になっており、とても興味深いものです。皆さんの中には、「ノルマ」

をこなすために参加している人もいるかもしれませんが、本学のチャペル行事を通じて、普段接する機会のない音楽や、聖書の考え方等に接する機会とされてはいかがでしょうか。

## チャペル行事で感じたこと

これから、私なりに本学のチャペル行事を通じて感じたことを述べてみたいと思います。

第1に、聖書の体裁についてです。皆さんの聖書には、「マタイによる福音書〇章△節」などという要領で、章や番号が付されています。大学チャペルでは同一の聖書を使用しているのですが、普段は意識することはないでしょうが、聖書の体裁、発行元、翻訳言語により頁数などは異なりますが、聖書の章や番号が統一されているので、多くの人々に参照すべき箇所を正確に伝えることができます。

実は、この参照すべき箇所を正確に伝える作業は、聖書の世界だけではなく、学問の基本です。現時点で、「様々な機会を通じて」すでに文献引用方法に言及して学んでいるかもしれませんが、皆さんには是非ともこの機会に引用のルールを取得して欲しいと思います。

第2に、本学の建学の精神「敬神愛人」についてです。私は、「敬神」については比較的早く理解できたつもりですが、「愛人」については正直なところ茫漠としている

という印象を抱きました。おそらく「愛」という言葉が、わが国では具体的な個人間で用いられる場合(「恋愛」など)を除いては、「郷土愛」や「愛社精神」のように何らかの共同体や組織に対する愛着を示すときに用いられることが多いので、「隣人を愛しなさい」というイメージが伝わりにくかったからではないかと思います。聖書の「自己を愛するのと同様に隣人を愛しなさい」という文言から、これは、「自己と他人の人格を尊重しなさい」というメッセージではないかと、私は理解しています。

第3に、聖書の世界と日本人についてです。現在、日本人の生活は欧米化されています。しかし、聖書がわが国に伝来したときは、聖書の世界観を日本人に伝えることが困難であったことでしょう。たとえば、肉食に関する記述や、神と人間との関係に関する記述などがそうした例です。

我々が聖書の世界観に接するときの疑問などについて、本学チャペルで奨励してくださる牧師による解説が大いなる助けになります。今後ともお世話になりたいと思っています。

(くにい よしお 法学部講師 2014.4.24 カレッジアワー奨励)



# どんなときでも

佐藤真史

何事にも時があり

天の下の出来事にはすべて定められた時がある。

生まれる時、死ぬ時

植える時、植えたものを抜く時

殺す時、癒す時

破壊する時、建てる時

泣く時、笑う時

嘆く時、踊る時

石を放つ時、石を集める時

抱擁の時、抱擁を遠ざける時

求める時、失う時

保つ時、放つ時

裂く時、縫う時

黙する時、語る時

愛する時、憎む時

戦いの時、平和の時。

(旧約聖書 コヘレトの言葉3章1～8節)

## 一瞬一瞬を生きる

何事にも時がある、全てのことには定められた時があるというコヘレトの言葉を読むたびに私は深い驚きを覚えます。なぜなら私たち人間が人生の中で体験する1つ1つの時を、コヘレトはここでよく言い表していると思うからです。人は産まれ、人は死にます。人は残念ながら人を殺してしまう時があります。でも人を癒す時もあります。戦い合う時も、平和を喜び合う時もあります。お互い暖かく抱擁する時もあれば、その抱擁をしりぞけてしまう時もあります。まさに私たちの人生1つ1つがこのコヘレトの言葉に刻まれ

ていないでしょうか。気を付けなければいけないのは、だから殺し合ったり、憎しみあったりしても仕方がないじゃないかとコヘレトが言っているのではないという点です。今生きている私たち一人一人が直面している現実、そこには殺し合いがあり、憎しみ合いがあり、災害があり、理不尽な出来事があります。しかし正直、目を背けたいこの現実からも目を背けず、向き合い、生き抜くことをコヘレトは私たちに呼びかけているのではないのでしょうか。なぜなら、どんな時でも、癒し合う時にも、愛し合う時にも、そして憎しみ合ってしまう時にも神様はそこにおら

れるからです。神様は憎しみのあるところに愛を、争いあるところに一致を、悲しみのあるところには喜びを求めておられます。まさしくこの一瞬一瞬を生きることをコヘレトは私たちに求めているのだと思います。

## ある訪問者

4か月ほど前のことです。ドイツの教会からルツさんとおっしゃる方を含め4名のお客様が仙台の被災者支援センター・エマオを訪問してくださいました。3・11から3年8か月が経った今もドイツの教会の方たちは被災地のことを覚え続けてくださっています。そして具体的にたくさんの方の献金をささげてくださっています。ルツさんたちをお連れして、エマオが毎朝通わせていただいている七郷中央公園仮設の集会所を訪問しました。七郷中央公園仮設には今も津波によって家を流された方たち、地震によって家がボロボロになってしまった方たちが24世帯50名ほど集われています。ルツさんたちをご案内した時、タカコさんという仮設に住む70代のお母さんがルツさんたちにたくさんお話をしてくださいました。津波で亡くなったお連れ合いのこと、荒浜にあった家も全部流されたこと、仮設に移ってからの日々のこと、タカコさんの持っていた畑もビニールハウスも農機も全部津波で流されたこと、でもそこから少しずつエマオのボランティアと一緒に綺麗に畑を戻してきたこと、そして今では仮設の方たちに声をかけてみんなで一緒に畑に行き作物を育てていること、それも少しでも仮設に住む一緒に住む周りの方たちを元気づけるためにみんなにお声掛けをしてくださっていること、タカコさんの話は尽きませんでした。ルツさんたちはその1つ1つにとっても丁寧な耳を傾けて

くださっていました。話がひと段落し、お茶を一緒に飲んでいる時にルツさんが私にそっと尋ねました。「タカコさんのお宅にお邪魔させてもらってもいいでしょうか」と。エマオでは丁寧なコミュニケーションを大切にしているので、お宅にお邪魔する時にはかなり神経を使い、普段でしたら初めてお連れする方と一緒に自宅に上がらせていただくなんていうことはしていません。けれども、ルツさんたちが丁寧に耳を傾けていた姿から、とりあえず聞いてみようと思い、タカコさんに聞いたところ、驚いたことに快く引き受けてくださいました。実は私自身、タカコさんの仮設のお宅に訪問させていただくのはその時が初めてでした。

お宅に上がらせていただいて、まず私はタカコさんのお連れ合いの仏壇にお線香をあげさせていただきました。もちろん仏様を拝むという意味ではなく、キリスト者として亡くなったお連れ合いの魂の平安を祈り、タカコさんの痛みと共にあるという願いを込めてです。驚いたのは、その私の姿を見て、ルツさんたちも一緒に祈ってくくださったことです。キリスト教国ドイツの教会から来たルツさんたちです。お線香をあげるなんていうことは初めての体験だったのではないのでしょうか。慣れない手つきでお線香をあげ、でもとても丁寧に祈ってくださっていました。そして誰よりもタカコさんがそのことを喜んでくださったのです。私はその時、ふと、神様がここに共にいてくださっているということを感じました。

## 神が共にいてくださる

「いつくしみと愛の」という私の好きなテゼ共同体の讃美歌があります。「いつくしみと愛のあるところに、神ともに」とい

う短いフレーズを何度も何度も繰り返して歌う讃美歌です。ルツさんたちとタカコさんが言葉や文化、宗教を超えていつくしみの気持ちを互いに分かち合ったその時、その場に、私は神様が共にいてくださっていると、まさにこの讃美歌にあるように感じたのです。津波で家を流され、お連れ合いが奪われ、一度も住んだことのない土地にある仮設住宅に暮らすということは、不条理に他なりません。けれどもタカコさんをはじめ、みなさんがよく私たちにおっしゃるのは「失ったものは本当に大きいんだけど与えられたものもあるんだよ」、という言葉です。もちろ

ん、繰り返しになりますが、不条理そのものを肯定することはできません。大地震も津波も東京電力福島第一原子力発電所の事故も受け入れることができるようなものではありません。けれども、どんな時でも共に歩んでくださっているのが神様です。それぞれが直面する不条理な時にこそ、私たちは目を背けずこの一瞬一瞬をいつくしみ合って、支え合って生きることが求められているのではないのでしょうか。どんな時でも、この私たちの現実のただなかに、神様が共にいてくださっている。そのことを信じて歩んでいきたいと願います。

(さとう まさし 日本基督教団東北教区被災者支援センター・エマオ 教団派遣専従者)



## ボランティアのすすめ

渋谷 照夫

「人にしてもらいたいと思うことは  
何でも、あなたがたも 人にしなさい。」

(マタイによる福音書 第7章12節)

きょうは、ボランティアについて、少しお話をさせていただこうと思います。

東日本大震災の発生から3年半がたとうとしていますが今なお、家を失った26万人の人々が仮設住宅での不便な生活を余儀なくされ、落ち着いて生活するための住環境の改善が進んでいないのが実情です。

甚大な被害を受けた水産業、農業も、復興の道は半ばです。このような状況を受け、学生支援センターでは、この夏も東北被災地支援ボランティア活動を継続し、参加者を募集しています。

「ボランティア」という言葉は、あえて説明するまでもないくらい、社会に広く浸透しています。意味としては「自分の意志で奉仕活動や社会活動を行う人」又はその活動そのものといったものです。

ボランティアという言葉には世界的な共通定義がありません。この為、国によっては宗教活動の一環だったり、奉仕活動だったりとして少しずつ意味合いが変わってきます。

基本理念(ボランタリズム)は、何事にも強制されず、個人の自発的な自由意志に基づいて行動する精神とされています。

ボランティアの歴史を簡単にお話しします。

社会福祉の歴史の中で、初めて組織的なボランティア活動が行なわれたのは19世紀のイギリスです。当時、ヨーロッパでは貧困者に対する国家政策は十分に行な

われていませんでした。

そこで、キリスト教信者による救済活動や、有識者が貧困者とともにスラム街に暮らしながら、考え方や行動に影響を与えて、生活の改善を図るセツルメント活動などが始まり、ボランティア活動へと発展していきました。

日本においては、戦後の混乱期である昭和30年代から全国的なボランティア活動が始まり、高度経済成長期の昭和40年代から50年代に活発化しました。しかし、1991年バブル崩壊により、それまで盛んだった大掛かりな企業ボランティアは影を潜めました。1995年に起きた「阪神・淡路大震災」により、世間のボランティアへの関心が高まりNPO法の成立につながったため、この年は「ボランティア元年」と呼ばれるようになりました。

その16年後の2011年3月11日に東日本大震災が起きました。報道で現地の状況が伝えられることにより、現地で生活する人々に共感し、何万人、何十万人ものボランティアが駆けつけ、さまざまな活動を展開しました。

みなさんの中には、震災復興は政府や地方公共団体の仕事であり、行政にすべて任せておけばいいのではないかと思うひとも多いと思います。大災害時には、行政が責任をもって復興の牽引役をしないといけないのは当然のことですが、行政の仕事には、被災状況の全体を把握した



上での公平性や平等性が求められ、行政まかせでは、被災者個々の多様なニーズに対応することが難しい側面があります。また、緊急時に俊敏に対応できる“機動性”もボランティアだからこそ得られるものです。

ボランティア活動を始めるきっかけは、一人一人違うと思います。しかし、多くの場合“何かの救いを求める人に、何かできることがないか”という、“受ける側”の悲しみや怒りの思いに共感し、行動することが多いと思います。

ボランティア活動の目的は、ボランティア活動の内容によって異なりますが、私たちの生活する社会において、起こる社会問題や課題の解決に対して、自分が出来ることを考えて、それを実行することです。

何が自分に求められているのかを見つけたのが大切です。ボランティアは、公平性や営利性にとらわれることなく、自発的・主体的な活動であるがため、その範囲、方法、手段、規模すべてが多様です。自分で考えだしたオリジナルのボランティア活動をそれぞれが取り組む事によって色々な場所でいろいろな活躍を期待する事が出来ます。

また、ボランティア活動は、人助けという要素だけでなく、活動そのものが楽しく、相互のふれあいの中で喜びを感じることで、それが重要だと思います。より広範囲な社会の中で、同じ目的を持った友人、知人が増え、社会に対する視野が広がり、やりがいを感じる事ができるものです。

ボランティアは、日常生活や心の豊かさを向上させるための重要な活動になってきています。

「ボランティア奮戦記」という本の中から、東北大震災後の学生ボランティアと宮城県牡鹿半島の漁師の関わりについて書かれている一文を紹介したいと思います。

「被災者から勇気をもたらした」「元気を

もらった」という声も多い。

ことわざの「情けは人の為ならず」にあるように、学生たちは被災地から多くを学び、帰ってくる。

元気をもらったのは学生だけではない。学生ボランティアと一緒に漁具回収を行った漁師が、遠く海を見つめ独り言のようにこう話してくれた。

「学生ボランティアが浜に来るまで、俺ら漁師は毎日毎日、海を見ては、ため息ばかりついていた。本当に力が出なかった。なんにもする気になれなかった。たくさんのがれきを見るたび、ほんとになにかから手をつけていいのかわからなかった。

学生ボランティアが浜にやってきて、津波で流された牡蠣ダルやロープや網を、山に入って一生懸命集めてくれた。その若い力を見ていて、立ち上がらなければならぬと思った。学生たちに引張られるように俺らも動き出したんだ。」

「正直なところ、津波があってから、この世に神様なんかいないと思った。本当に神様がいたら、何にも悪いことしていない浜の人たちを、こんなに苦しめることはしないと前から思っていた。でも今は、やっぱり神様はいるんだと思うようになった。俺らにとっての神様は、ボランティアのみんなだよ」

この言葉には学生と被災者の距離を埋め、ボランティアが被災地で活動する大きな意義が集約されています。

また、ボランティア学生が見た夢が紹介されています。

「ある日、こんな夢を見た。どこかの被災地で活動している自分の姿。ふと海に目をやると救援に駆けつけた漁船の群れ。その漁船に、なびく大漁旗には、石巻や牡鹿半島の文字が描かれている。大きく手を振る真っ黒に日焼けした漁師たちの顔。船にはたくさんの水と食料。寝る前に読んでいる愛読書『ONE PIECE』のような夢だった。必ず災害はやってくる。次

の災害に備え、船を操る頼もしい仲間が増えたのだ。」

ボランティア学生にとっても、漁師さんが自分の仲間になったと思えるほどの関係性ができ、それを夢にまで見るようになったのだと思います。

名古屋学院大学の東北震災支援ボランティア活動は、震災直後から学生自治会やボランティアサークルが中心となり、街頭募金の活動を始めました。震災後の最初の夏休みから、NPO法人レスキューストックヤード・東北学院大学・日本キリスト教団東北教区センターエマオ・日本聖公会などと連携し、東北の被災地、宮城、岩手県を中心に、ボランティア活動に参加しました。

がれきの撤去作業を主な活動として始まり、その後のボランティア活動は、みなし仮設住宅の交流会、足湯での交流会、津波で流されたがれきの中の写真の洗浄、スポーツ健康学科の学生が主催した健康運動教室、漁業、農業復興支援、仮設住宅の方との交流会、幼稚園への訪問、植物園の花壇設置整備など多岐にわたったボランティア活動へ広がってきました。

今年の夏からは、復興インターンシップの活動も始まりました。復興インターンシップは、東北学院大学と復興大学が主催するプロジェクトで、水産業・水産加工業などの被災企業で職業体験をし、被災企業の現状、復興の進捗状況など、感じ、学んだことを名古屋に帰ってから、報告会やパネル展示、大学祭の模擬店で被災地産品を食材とした料理の提供など情報発信を行うプログラムとなっています。

名古屋学院大学のボランティア活動は、被災地でのボランティア団体との連携によって行われます。ですので、全国から集まった大学生や東北学院大学の学生など、ボランティア活動を行う横の交流がうま

(しづやま てるお 学生支援センター課長 2014.7.3. カレッジアワー奨励)

れ、学生同士のつながりも広がります。

東北被災地支援ボランティアの参加学生も延465名となりました。

ボランティア活動を経験した学生の変化を、その表情と言葉で感じることが出来ます。

2014年の春休みの東北被災地ボランティアに参加した学生の感想で、

「被災地支援ボランティアに参加して、これからは1日1日を大切に、普通に生活できることに感謝したい」、「ボランティアをするということが、ボランティアをする側、受ける側にとってプラスになることを知りました。」

との感想を述べる学生が多くありました。また、今年の夏、福島の子供を名古屋に招いて、原発の放射能を気にすることなく、思い切り外遊びを体験してもらった「名古屋いりゃあせツアール」プロジェクトが瀬戸キャンパスを宿泊場所として、行われました。このプロジェクトに参加した学生から、ボランティア参加まえには、年下の子供たちは苦手な意識があった。以前は、子供は「うるさい」と思っていたが、この福島の親子を招くボランティアに参加して子供が可愛いと思えるようになった。と心の変化を語ってくれました。

ボランティアの体験で小学生と寝起きを共にし、活動を共にすることによって、学生が意識を変え、意識の変化が物の見方を変えていったといえるでしょう。

ボランティアの参加を、迷っている人がいたら、「ボランティアは、誰でもできる」、「何の役にも立たないかもしれないが、何かの役に立つかもしれない」と気軽に考えて行動を始めてほしいと思います。「学生しかできない。学生だからできる。」活動が必ず見つかるはずですよ。

ぜひ、ボランティア活動に参加してください。

## 新入生の皆さんへ

### 敬神愛人



(F.C.クライン)

「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか。」  
イエスは言われた。「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを  
尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最  
も重要な第一の掟である。

第二も、これと同じように重要である。「隣人を自分の  
ように愛しなさい。」

(新約聖書 マタイによる福音書22章36～39節)

名古屋学院大学に入学された皆さん、ご入学おめでとうございます。  
皆さんは自分で選んだにせよ、大学に選ばれたにせよ、とにかくこの大  
学の学生となられたのです。皆さんはこの大学について何をご存知で  
しょうか。これからいろいろな機会に聞かれたり、読まれたりされるで  
しょうが、ここでも少しお話したいと思います。

☆

私立の学校はそれぞれ独自の理念、「建学の精神」を持って建てられ、  
またそれを継承して運営されています。わが名古屋学院大学の「建学の  
精神」は「敬神愛人」です。これは前述の新約聖書から引用されました。

人間は神を愛し敬うこと、そして自分を愛するように隣人を愛すること、  
この「敬神」と「愛人」を一番大切な掟として守らなければならないとい  
う、イエス・キリストの教えです。これは、ただ人と仲良くしなさいとい  
うヒューマニズムからだけでなく、神を敬うことによって成立する隣  
人愛です。これを教育の基本にしているのです。

☆

1883年、アメリカからフレデリック・チャールズ・クライン(F. C.  
Klein) という宣教師がキリスト教の伝道と英語学校を目的として来日  
しました。そして横浜に英語学校、教会をつくるなど伝道の成果をあ

げ、彼が次の着任地として夫人とともに名古屋に来たのは1887年です。  
彼らは名古屋に着いたその日から英語の学校を開いたのです。現  
在は名古屋市中区栄のちょっと東に位置します。その「私立愛知英語学  
校」は「名古屋英和学校」と改称し、これがわが名古屋学院大学の基とな  
りました。

その時、クライン博士がその教育の基本理念として掲げたのが「敬神  
愛人」でした。

☆

新入生の皆さん、皆さんはこれから少なくとも四年間はこの大学の学  
生として勉強をしていくのです。ここでは勉強ばかりでなく、人間を成  
長させていくことにも励んでください。

そして私たちは祈っています。「敬神愛人」が示すように、皆さんが自  
分を愛するように他人を愛することができますように、また、人間の力  
を過信することなく、それをはるかに超えた存在を認める、謙虚な人間  
へと成長を遂げることができますように。

### ◆ チャペルへの招き ◆

チャペルでは週に二回、それぞれチャペルアワー、カレッジアワーと  
称してキリスト教の礼拝の時間を設けております。チャペルに集い、教  
職員や近郊の牧師の奨励を聴き、賛美歌を歌います。大学は決して、皆  
さんにキリスト教の信仰を持たせようと考えているわけではありません  
が、世界の大きな文化の源流の一つともいえるキリスト教に少しでも触  
れて、何かを感じていただければと考えております。

<名古屋キャンパス>:チャペルアワー 火曜日12:40～13:10 白鳥学舎チャペル  
カレッジアワー 木曜日12:40～13:10 白鳥学舎チャペル

<瀬戸キャンパス>:チャペルアワー 金曜日13:00～13:30 瀬戸学舎チャペル  
(第1週目の金曜日はカレッジアワーとして実施)

☆

チャペルは原則としていつでも開いています。静かに落ち着きたいとき  
はどうぞお気軽に利用してください。ただし、大声でのおしゃべり、飲食  
は禁止です。チャペルの椅子に座り、静かに自分と向き合い、語りかけ、そ  
して内なる声に耳を傾けると、新しい導きをそこに見出したり、また何  
か発見があるかもしれません。また、チャペルでは宗教講演会やコンサ  
ートなどの様々な行事や勉強会などを行っています。